地理学専修所蔵の隠岐国図３点

米家　泰作

１．はじめに

京都大学文学部の地理学実習では，地域調査や GIS のほかに，地理学専修が所蔵する近世・近代の地図資料について学ぶ時間を設けている（担当は筆者）。近世の古地図は明治末の地理学教室設置後，積極的に収集してきたものであり，旧国単位の絵図が含まれている（金田 2001，京都大学大学院文学研究科地理学専修 2016）。今年度の古地図実習では，隠岐諸島を調査地とするのにあわせて，３点の隠岐国図を取り上げた。そこで本研究では，実習で扱った隠岐国図の資料紹介を行いたい。

対象としたのは次の３点である（分類記号順）。

① 「隠岐国」写本手彩色，27.5×38.5 cm（分類記号 V リ 14，図書登録番号 107353，1911 年 2 月 5 日受け入れ）27.5×38.5 cm

② 森幸安「日本志山陰部　隠岐国地図」写本手彩色，78×135 cm（分類記号 V リ 15，図書登録番号 86541，1909 年 6 月 15 日受け入れ）

③ 「隠岐国」写本手彩色，63×75.5 cm（分類記号 V リ 16，図書登録番号 123693，1913 年 5 月 20 日受け入れ）

３点のうち作者・年代が明記されているのは②のみであり，他の２点は書誌的な情報に乏しい。以下では，まず幕府撰国絵図との関わりが認められる③を取り上げ，次いで①を，そして作者や作成意図が明確な②の順に紹介する。

２．寛永国絵図系統の「隠岐国」（③）

本図は右を北とし，島前・島後を南北に配置する（写真１）。地図の表現は，海岸線や村名（円で囲われ，村高を付す），山形を線描し，街道・航路を朱線で加える形をとる（写真２）。東南の空白に隠岐国と各郡の石高を記載している。内題の記載はないが，折りたたんだ状態でおもてにくる位置に「十九　隠岐国　角印（酒井）」との裏書きがある。

村名の記載様式や石高の付記は，江戸幕府が調製した国絵図との関連を示唆する。幕府撰の隠岐国絵図は，寛永国絵図（1633 年，巡検使国絵図），正保国絵図（1645 年，出雲国隠岐国絵図），天保国絵図（1838 年）のほか，失われた元禄国絵図との関わりが示唆される文政国絵図（1826 年）が知られている（国絵図研究会 2005，藤原 2006，2012）。これらの幕府撰国絵図が描く隠岐諸島の形状（図１）を写真１と比較すれば，明らかに寛永国絵図と構図や方位が類似しており，その系統の縮図であると考えられる。例えば，島前を島後の南に配置する点や，島後の全体的な形状を丸く描くところや，また島前の大口（中ノ島と知夫里

写真１　「隠岐国」（③）

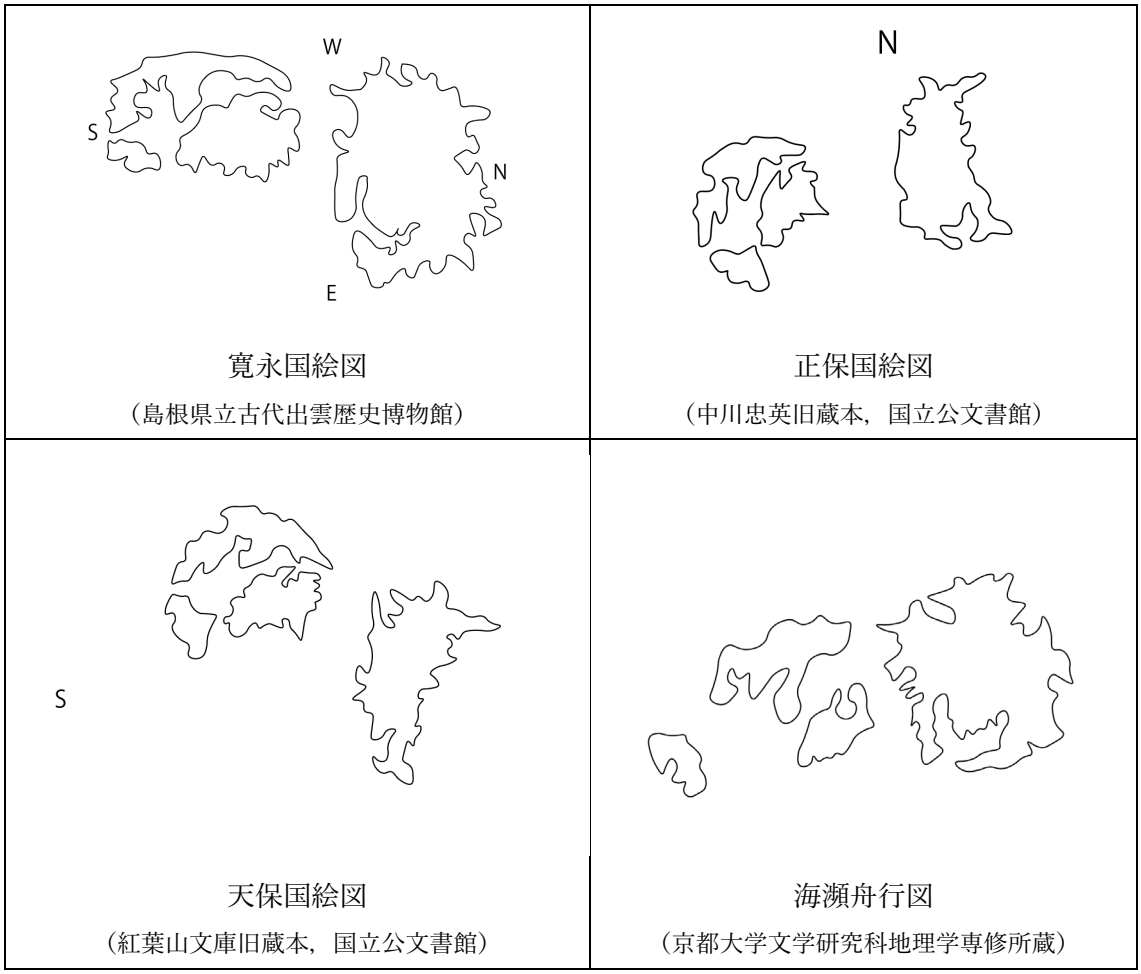
京都大学文学研究科図書館（地理学専修）所蔵。

写真２　「隠岐国」（③）の島後・大満寺付近

所蔵は写真１に同じ。

島の間）を広くとる点が挙げられる。加えて，知夫郡を「千波郡」とする用字も，寛永国絵図の特徴とされる。

ただし，記載された石高（越知郡 2,572 石余，周吉郡 3,485 石余，海士郡 2,372 石余，千波郡 3,137 石余）は，寛永国絵図を含め，知られている幕府撰国絵図の記載石高（藤原 2006，2012）のいずれとも一致しない。ただ，石高の数値は寛永国絵図と正保国絵図のそれに比較的近い（例えば周吉郡の場合，寛永国絵図では 3,679 石，正保国絵図で 3,467 石，文政国絵図で 3,606 石，天保国絵図で 3,906 石）。それゆえ，本図は寛永国絵図の系譜を引く 17 世紀半ばの隠岐図，あるいはその写本の可能性が高いと考えられる。



寛永国絵図
（島根県立古代出雲歴史博物館）

正保国絵図
（中川忠英旧蔵本，国立公文書館）

天保国絵図
（紅葉山文庫旧蔵本，国立公文書館）

海瀬舟行図
（京都大学文学研究科地理学専修所蔵）

図１　隠岐国絵図・海瀬舟行図にみる隠岐４島の海岸線

藤原（2012）および京都大学文学研究科地理学専修所蔵『海瀬舟行図』(注 2 参照)から，島前（中ノ島，西ノ島，知夫里島）・島後をトレースして筆者作成（他の小島は含まない）。図中の四方位の記載が確認できるものは記号（東 E・西 W・南 S・北 N）で記した。

３.「竹島」を描いた「隠岐国」(①)

本図は３点の隠岐国図のなかで最も小さく，内容も簡略である（写真３）。陸地の輪郭は黄緑色で，海岸と河川は青く彩られているが，絵画的描写には乏しい。ただし「隠岐国」と四角で囲われた内題の左に，三行にわたって竹島にかかわる記述があり，これを含めて隠岐国として描くようにみえるところが注目される。

まず島前・島後の表現をみれば，陸地の地名記載は 16 か所しかなく，主要な村里のみを記すにとどまる。北を上とし，東西に島後・島前を配置する構図や，島後の東海岸を直線的に描くところは，先に取り上げた寛永国絵図やその系譜にある隠岐国図とは異なるところで，正保国絵図の表現に近似している。また，次に触れる竹島の記載に『隠州視聴合記』（1667 年）の引用とみられる箇所があることから，それ以降の写本だと考えることができる。ただし，作成年代の下限を限定するのは難しい。

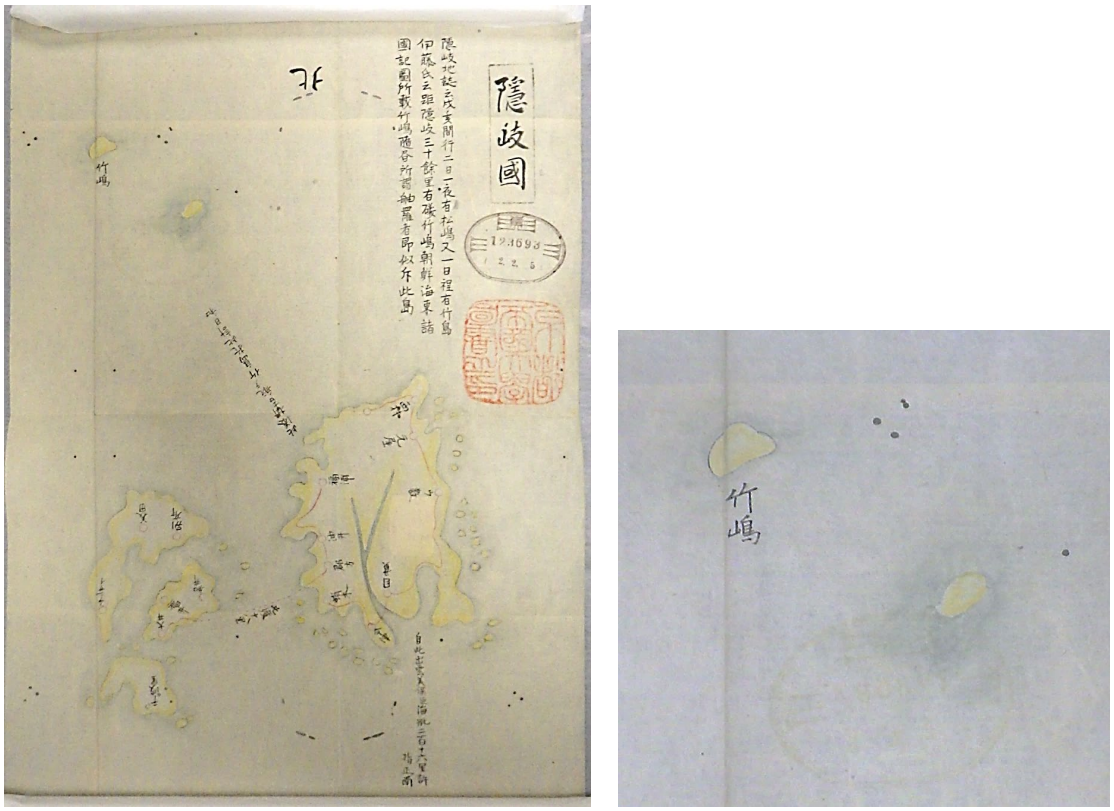


写真３　「隠岐国」（①）およびその「竹島」付近

京都大学文学研究科図書館（地理学専修）所蔵。

竹島にかかわる記載は次のとおりである（以下，資料の句読点は筆者による）。

隠岐地誌云，戌亥間行二日一夜，有松島，又一日程有竹島。伊藤氏云，距隠岐三十余里，有磯竹島。朝鮮海東諸国記図所載竹島，隋書所謂舳羅者，即似斥此島。

『隠岐地誌』に云うとして記載された内容（戌亥間行･･･有竹島）は，『隠州視聴合記』の記す竹島の記述に合致する[1]。隠岐から西北に２日進めば松島（現在の竹島，韓国側の呼称は独島）があり，さらに１日で竹島（現在の鬱陵島）に至るとするものである。本図中の「竹嶋」とその東南に記された島名を欠く島嶼は，この松島と竹島を描いているように解される。また，島後の福浦から竹島に向けて，渡海にかかわる説明が線状に記されている。ただし本図は，二つの小島からなる松島（現在の竹島）の形状を正確に描写しているとはいいがたい。

知られている幕府撰隠岐国絵図（国絵図研究会 2005，藤原 2006，2012）には，竹島ないし松島は明確に描かれていない。ただ，正保国絵図には福浦付近に竹島への渡海の情報が記されており，以降の文政・天保の国絵図もそれを踏襲している。本図はこうした国絵図とは対照的であり，渡海にかかわる説明だけでなく，竹島（鬱陵島）と松島（竹島）を明確に描

[1]『隠州視聴合記』については，島根大学附属図書館デジタルアーカイブを参照した。
https://da.lib.shimane-u.ac.jp/content/ja/702

く点で，興味深い存在である。ただし，本図の存在がただちに現在の竹島が日本領であることの証左となるわけではない。近世においても竹島の扱いは複雑に変遷しており，本図が描く竹島の背景については，その経緯のなかで吟味される必要がある。後考を待ちたい。

４．森幸安「日本志山陰部隠岐国地図」（②）

最後に，作成年（1752 年）・作者（森幸安）が明確な「日本志山陰部隠岐国地図」をとりあげる（写真４）。本図についてはすでに上杉和央（2010）の指摘があり，近世半ばの地誌・地図学者，森幸安の自筆図とされる。上杉によれば，本図は単独で作成されたものではなく，日本総地誌として構想された『日本志』を構成する地誌・地図の一つとして用意された。本図のほか，「美作国地図」（1749 年），「日本志山陽部備前国地図」（1752 年），「日本志山陽部備中国」（同年），「日本志山陰部伯耆国地図」（1754 年），「日本志山陰部因幡国地図」（同年）も，本地理学専修が所蔵している。つまり本図は，1870 年前後に山陰・山陽の各国図をまとめて作成していた森幸安の成果物の一つだといえる。

描かれた内容は，村名を長円で囲い，郡ごとに色を換える点や、陸路・航路を朱線で記すところは，幕府撰国絵図に類似する（写真５）。一部の町場的な集落名は円ではなく赤い長方形のなかに記されている。寺社や史跡の一部は建物が朱で描かれ，青緑で縁取った山地の絵画的な描写や，水色で広がる海洋とあいまって，本図はとても色彩豊かな印象を与える。また，竹島への航路の情報も図中に書き込まれている。

しかし陸地の形状は，知られている国絵図には明確に似たものがない。島前・島後を東西

写真４　森幸安「日本志山陰部　隠岐国地図」（②）

京都大学文学研究科図書館（地理学専修）所蔵。

に配置する構図は，前節で触れた正保国絵図と一致しているが，入り組んだ海岸線を強調した島後の状況や，島前の知夫里島を他島から離して置くやり方は，特徴的である。これに関しては，本図の北辺の余白に設けられた付記に経緯が記されているので参照しておこう。

付記（資料１）は，まず延喜式に触れつつ，沿革と境域を簡単に述べ，伝統的な地誌の様式をなぞっている。また改行して「或人ノ曰ク」と述べ，土産の名称や島後の西郷一帯について触れる。ただしここまでの記載は，『隠州視聴合記』の記述に一致するところが多く，これに依拠して記述されたとみられる。その上で，「按ルニ」として，森幸安自身が接した隠岐の産物（桑寄生（ヤドリギ）や椎茸）について述べる。

写真５　「日本志山陰部　隠岐国地図」（②）より焼火神社付近

所蔵は写真４に同じ。

続いて，地図作成の上で注目すべきこととして，「世ニ流布ス隠岐国ノ写画国，其図形地理未全カラズ」と指摘し，「日本輿地図」や「日本海浜ノ図」に依拠したと述べる。このうち「日本海浜ノ図」は『海瀬舟行図』の名称でも知られる航路図を指すと思われる。『海瀬舟行図』に示された隠岐諸島（図１参照）と本図が描くそれを比較すれば，知夫里島を離して描く不正確な位置関係を含め，明らかに近似している[2]。京都や大坂を拠点とした森幸安は，現地に赴くことなく，こうした資料を活用することで，自身の『日本志』にかかわる地図作成を進めた，ということができる。

森幸安の付記は，最後に，隠岐国と同じく島国である対馬，佐渡，淡路，壱岐と島の大き

[2] 京都大学文学研究科地理学専修所蔵『海瀬舟行図』を参照した。これは京都大学貴重資料デジタルアーカイブで公開されている。https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00022925?page=201

さを比較し，隠岐は壱岐よりは大きいが，他の三島よりは小さいと指摘している。こうした島国の比較は，『日本志』を構想し，各国の地図を自ら描いた森幸安ならではの気づきだといえる。

ただし，国絵図の調製をたびたび命じた江戸幕府の立場とは異なり，森幸安は一介の市井

資料１　「日本志山陰部隠岐国地図」（②）付記（読み下し）と識語

〇延喜ノ式ニ曰ク，隠岐国下管四郡。曰ク知夫［夫一ニ波ニ作ル］，曰ク海部［部一ニ夫ニ作ル］，曰ク周吉，曰ク隠地［一ニ越知ニ作ル，又隠知ニ作ル］，是也。〇疆域，四至皆海浜也。国之周廻二十里余。帆路一日ニ廻ル。当国ハ北海中ニ在，国府ハ周吉郡西郷豊崎ナリ。是ヨリ南ノ方，雲州美穂ノ関ニ至ル，三十五里。東南ノ方，伯州赤崎浦ニ至ル，四十里。西南ノ方，石州温泉ノ津ニ至ル，五十八里。〇和名類従抄ニ曰ク，田六百二十四町。〇見稲簿ニ曰ク，米一万一千八百三石。民部古ノ図帳ニ曰ク，国造ヲ以，田三町ノ地，之ヲ充。凡ソ諸健児傜役ヲ免云々。〇当国ハ北極地ヲ出コト三十七度半，寒雪尤甚シ。民俗柔弱，害悪ニ抱ラズ，風ニ従フ草ノ如シ。然ト雖，石州ニ競ルトキハ遠島ト雖風俗勝ル。知夫ノ一郡，素朴直質，約シテ頼有。

〇或人ノ曰ク，近世賦所米，毎年一万一千六百石余ト云々。土産ハ漆，椿実，山椒，紫藻，鯛，鰯，鰤，鰩，鯖，石決明，乾海参，雁賊，馬皮等貢ス。西郷古府，矢尾村，西下村，西村之東。其山ヲ甲尾ト謂。庄野五郎カ之城跡也。松杉多ク，九折三四町，諒天府ノ要害也。国人恐レテ常ニ登ラズ。今其ノ地ニ八幡宮座ス。東麓一川ヲ帯，矢尾町ヲ遶ノ故ニ矢尾川ト謂。昔ハ橋有テ城門ニ至ル。川ヨリ東ノ山上，今新府也。北小山ニ続クト雖，三方ハ岸高シテ通シ難シ。南ハ海也。伯州雲州等之諸山ヲ眺望ス。又曰ク，矢尾町ハ川ニ傍フテ南北長山ニ随，住居ス。水上ニ新八幡宮有，五郎君ヲ配祭ス。川流之水口ニ長洲有。又曰，矢尾町，目貫町，宇屋町，国人之ヲ三個処ト謂也。〇按ルニ享保ノ初年，此ノ国ノ人，桑寄生，椎蕈之二品ヲ以，予之友南條道意ニ贈ル。両品倶ニ甚佳ナリ。桑寄生，薬店ニ稀ナリ。椎蕈ハ茶会之饗応ニ預ル。其ノ大サ六寸許，風味至テ美ナリ。又按ルニ，世ニ流布ス隠岐国ノ写画国，其図形地理未全カラズ。其余，未詳密ノ図ヲ見ズ。故ニ今，日本輿地図［并何貯ル所］，日本海浜ノ図［官正ノ本図ナリ］，□□図，是等ヲ以テ当州之地理ヲ考ヘ，此ノ図ヲ作テ，日本志山陰道ノ部ノ地図ト為コト，然リ顧フニ，此ノ隠岐国ハ島国ニシテ，佐渡ノ国ト競ルトキハ，則尤モ小国也。周廻二十里余ニシテ，四方一日。又佐渡国ハ周廻五十余里，対馬ノ国ハ周廻七十余里也。是等之国ニ劣ル。又壱岐ノ国ハ周廻十三里アリ。然レハ壱岐国ニハ勝ル。又淡路ノ国モ周廻三十里許有。以上五州ハ，倶ニ陸ヲ隔シテ島国也。

宝暦二年壬申八月十一日

摂州浪華高津之地宇木堂

京師書生　森謹齋幸安図并識

読み下しに際しては，原文にある返り点や一二点，送り仮名に従ったほか，送り仮名を補った箇所がある。［　］は割り注を示す。なお□□の箇所は空白である。句読点は筆者（米家）による。

の学者に過ぎず，強い権限と資金を持っていたわけではなかった。幕府撰国絵図に接する機会を得ないまま，「世ニ流布ス」地図のみを材料とした森幸安の隠岐図は，必ずしも「正確」とはいえない内容を含んでいた。しかしながら，そうした地図を市井で作成しつづけた森幸安の意欲と熱量は，近世日本の社会で地図が帯びていた磁場のようなものを指し示している。地図と社会の間柄を考える上で，やはり森幸安は興味深い存在だといわねばならない。

5. おわりに

本研究では，地理学専修が所蔵する隠岐図３点について，簡単ながら資料紹介を行った。いずれも近世半ば（かそれ以降）の地図であるが，それぞれ対照的な内容をもつ。すなわち寛永国絵図の系統をひくもの（③），「竹島」を描くもの（①），そして市井の地誌・地図学者が描いたものであり（②），内容の詳細さや正確性もさまざまである。ただし本研究は，隠岐国図の網羅的，あるいは系統的な検討を意図したものではなく，地理学実習で扱った地理学専修が所蔵する隠岐国図を資料紹介したにすぎない。しかし結果的には，近世の隠岐国図がもつ多様な姿を一瞥することができたように思われる。

なお今回，地理学専修の古地図コレクションのうち隠岐国図に注目して気づいた点は，本コレクションがまんべんなく各旧国の地図を含んでいることである。意図的に収集されたものか，もともと各国の地図が揃った状態でコレクションに加えられたのか，いずれにしても近代の大学地理学教室における古地図収集のあり方について，興味深い示唆を与えているように思われる。この点についても後考を待ちたい。

写真は全て筆者の撮影であり，京都大学文学研究科図書館の許可を得て掲載している。

文献

上杉和央（2010）．地図史における森幸安の再布置．歴史地理学 52(1)，56-68.

京都大学大学院文学研究科地理学専修(2016).『京都大学大学院文学研究科地理学教室収集　古地図目録』丸善出版.

金田章裕編集代表（2001）.『京都大学所蔵古地図目録』京都大学大学院文学研究科.

国絵図研究会（2005）.『国絵図の世界』柏書房.

藤原　茂（2006）．絵図にみる近世の隠岐．島根大学附属図書館『絵図の世界』ワン・ライン，128-136.

藤原　茂（2012）．隠岐国絵図．島根大学附属図書館『島根の国絵図』今井出版，101-128.